

St. Luke's International University Repository

ディスクオリフィケーションを予測する「問題-相互作用モデル」の提案:夫婦の葛藤的会話の分析から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): Disqualification, Married Couple's System, Problem-Interaction Model 作成者: 若島, 孔文 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/449

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



報 告

ディスクオリフィケーションを予測する
「問題－相互作用モデル」の提案
－夫婦の葛藤的会話の分析から－

若島 孔文¹⁾

The Proposal of “Problem-interaction Model” to
Predict the Disqualification:
On the Analysis of the Conflicting Discourse of Married Couples

Koubun WAKASHIMA, Ph.D¹⁾

〔Abstract〕

In this study, I took the centrifugal movement of the couple's system at the height of the problem level and the interaction level, and examined whether the possibility that the receiver's reaction disqualifies would rise or not, proportionally to the rise of the centrifugal movement.

At the analysis 1, as the macro analysis, I took conflicting discourse which couple took up at the height of the problem level. Then, I examined it from the point of one's disqualification against the other's height of interaction level (direction of the view, the nod demanding a reaction, interactive gestures, the interpersonal language). As a result, it became clear that the disqualification could be predicted to some extent according to the problem level and the interaction level.

At the analysis 2, as the micro analysis, I took up, as the act index, one's direction of the view line, the nod demanding a reaction, the smile, the laughter, the avoidance, the nod showing a reaction, the interactive gesture, the topic gesture and the self disqualification. Then I examined in detail the other's disqualification occurred in the flow of what type of communication. As a result, a pattern became clear in which one's disqualification occurred to side with the other's disqualification and the ambiguous, explanatory non-verbal behaviors.

〔Key Words〕 disqualification, married couple's system,
〔キーワード〕 ディスクオリフィケーション, 夫婦システム,
problem-interaction model.
問題－相互作用モデル

1) 立正大学心理学部 臨床心理学 Department of Psychology, Rissho University. (clinical psychology)

〔抄 録〕

本研究では、夫婦システムの遠心的動きを問題レベルと相互作用レベルの高さによって捉え、その遠心的動きの高まりと比例して受け手の反応がディスクオリファイする可能性が高まるか否かを検討した。分析Ⅰではマクロ分析として、夫婦が取り上げた葛藤的会話を問題レベルの高さで捉え、夫婦の一方の相互作用レベルの高さ（視線の方向付け、反応を求めるうなずき、相互作用のジェスチャー、対人言語の総量）に対する他方のディスクオリフィケーションの総量という点から検討した。その結果、問題レベルと相互作用レベルによってディスクオリフィケーションがある程度予測されることが明らかになった。次に分析Ⅱではマイクロ分析として、一方の視線の方向付け、反応を求めるうなずき、笑顔、笑い、回避行動、反応を示すうなずき、相互作用のジェスチャー、話題ジェスチャー、自己ディスクオリフィケーションを行動指標として取り上げ、それに対して他者のディスクオリフィケーションがどのようなコミュニケーションの流れの中で発生しているかをより詳細に検討した。

その結果、一方のディスクオリフィケーションは、他方のディスクオリフィケーションと曖昧で説明的な非言語行動が同調したパターンで生起することが明らかになった。

I. 問 題

Bateson, G.¹⁾らの二重拘束論文では、メッセージを構成する要素が統合され意味を構成する場合と、逆にその要素が伝達するメッセージが相反した意味を構成する場合があるということが提示された。この後者のようなコミュニケーションをHaley, J.²⁾はディスクオリファイ (disqualify) したメッセージと呼び、また、Watzlawick, P.³⁾はディスクオリフィケーション (disqualification) として定義した。ディスクオリフィケーションとは、Bavelas, J. B.⁴⁾によると、送り手、内容、受け手、文脈に関する情報の相対的曖昧さである。Bavelas, J. B. & Smith, B. J.⁵⁾は間主観的方法、例えば、7セッションのトレーニングをつんだ複数（6人から12人）の独立した判定者の評価に基づきディスクオリフィケーションの判断を行っている。そのような判断法を基礎として、Bavelas, J. B.⁴⁾は、こうしたコミュニケーションが個人的なコミュニケーションスキルや精神病理の問題というよりも、むしろ回避-回避の葛藤状況（この実験における具体的な状況は、嘘をつくことを避け、同時に、他者を傷つけるような真実を話すことを避ける状況）で、ディスクオリフィケーション反応が選択されることを明らかにした。その後、

Bavelas, J. B. & Chovil, N.⁶⁾は先の研究と同様な刺激文を被験者に提示し、自由に反応するよう求め、その反応を送り手、内容、受け手、文脈の4次元において間主観的方法を用いて評価した。その結果、4次元全てにおいて、統制条件（非葛藤条件）に比べ、葛藤条件においてより曖昧であると判断された。現在、Bavelas, J. B.⁷⁾らはそのようなコミュニケーションを曖昧なコミュニケーション (equivocal communication) と定義し、いくつかの実験的研究を行っている。例えば、政治的メッセージに見られる曖昧なコミュニケーションについての分析や、真実-嘘というメッセージが伝える内容と明瞭-曖昧というメッセージの伝え方の2次元を区別し、回避-回避の葛藤状況では曖昧であるが真実の反応、つまり、嘘ではない反応が最も選択されやすいことを明らかにしている⁸⁾⁹⁾。以上の研究において共通して強調されている点は、分裂病患者とその家族に限らず、人々の一般的な相互作用でも、そのようなメッセージが生起しているということである。こうした知見に基づき、若島ら¹⁰⁾は二重拘束という現象が対人システムの遠心的動きに対する反作用として必然的に生じるコミュニケーションの一般的形態であることを示すことを目的とし、持続が見込まれる関係にある4組の夫婦を対象に、葛藤対処機能としての矛盾

するメッセージ（個人内のメッセージ間の矛盾：同時文脈，累積文脈を含む参考として，Bavelas, J. B. & Chovil, N.¹¹⁾）の伝達とディスクオリフィケーション反応（送り手のメッセージに対する受け手の反応の曖昧さ）の検討を行った。その結果では，①一般的な会話条件に比べて葛藤的会話条件で，より多くの矛盾するメッセージが使用されること，そして，②一般的な会話条件に比べて葛藤的会話条件で使用される矛盾するメッセージがその受け手にディスクオリフィケーション反応を導かせること，が明らかにされた。しかし，この研究では，システムの遠心的動きのレベルが考慮されていないという問題がある。システムの遠心的動きを生起させるという点において，葛藤的会話で話し合われた話題がどの程度夫婦システムに危機を生じさせるかということ，そして，その話題に対する反応がどの程度求められているかということとを考慮する必要がある。つまり，持続的関係が見込まれる人々において関係を危険にさらす葛藤的会話場面でディスクオリフィケーションがより多く生起するという点から，二重拘束的コミュニケーション現象は（関係の破壊に影響があるという点において）葛藤的会話のレベルが高く，その葛藤的会話にどの程度言及しているかということによって説明可能なのではないかということが仮定される（以下，この仮定を便宜的に，問題-相互作用モデルと呼ぶ）。

1. 本研究の目的

本研究では，システムの遠心的動きを問題レベル（会話において取り扱われた問題が関係性を危険にさらすという意味において如何に葛藤的会話であるかというレベルを示している）と相互作用レベル（その葛藤的会話の話し手がその受け手に対して求める反応の強さのレベルを示している）の高さによって捉え，その遠心的動きの高まりと比例して受け手の反応がディスクオリフィケーションの可能性が高まるか否かを検討する。そこで，分析Ⅰではマクロ分析として，夫婦が取り上げた葛藤的会話を問題レベルの高さで捉え，夫婦の一方の相互作用レベルの高さ（視線の方向付け，反応を

求めるうなずき，相互作用的ジェスチャー，対人言語の総量）に対する他方のディスクオリフィケーション反応の総量という点から検討していくことにする¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾¹⁵⁾。分析Ⅱではマイクロ分析として，一方の視線の方向付け，反応を求めるうなずき，笑顔，笑い，回避行動，反応を示すうなずき，相互作用的ジェスチャー，話題ジェスチャー，自己ディスクオリフィケーション反応を行動指標として取り上げ，それに対して他者のディスクオリフィケーション反応がどのようなコミュニケーションの流れの中で発生しているかをより詳細に検討していくことにする。

Ⅱ. 方法

1. 被験者

20代の夫婦4組（平均年齢は，男性25.0歳，女性24.5歳，結婚してから平均期間9.8カ月，知り合っからの平均期間60.5カ月，離婚歴は無しであった）。被験者は，“夫婦間で繰り返し起こり未だ解決に至らないささいな問題について話し合う心理学の実験への参加”として募集された。

2. 手続き

実験者は被験者の自宅を訪問し，その一室にビデオカメラを設置した。実験者は，被験者に参加してくれたことに対してお礼の言葉と研究の目的を述べるなど数分間の会話をした。ある程度のラポールが形成された後，まず，年齢や結婚してからの期間，知り合っからの期間等について尋ねる質問紙を被験者に手渡し記入するよう求めた。次に，ビデオカメラが設置してある椅子の方へ移動するよう促し，教示を始めた（2者間の椅子と椅子の距離は約1.2メートル。その理由は動作の生起を妨げないためと，ビデオ撮影の妨げにならないためである）。全ての被験者は場面に慣れるように，最初に比較的協調的な会話をするよう配慮された課題が与えられた（教示1“2人で旅行をすることになりました。どんな場所に行き頃どんな方法で行くかなど，2人で協力して決めて下さい。10分間くらい話し合ってください”）。教示

1を終えた後、実験者は別室に移動した。この課題についての会話が終わった後、部屋に戻り、葛藤の会話課題を促すために教示2を始めた。参考リスト〔注：参考リストは一般的に夫婦で起こりがちな例をいくつか記述したものであった。このリストは筆者から利用できる〕を見せて“これらを参考にしてあなた方の関係で繰り返し起こっている未解決な問題を回想してみてください。これから約15分間で、お互いにそのことについて問題提起し、話し合ってください。今までにも話し合って解決したいとは思っていたが未だ解決していないささいな問題についてここでひとつ話し合ってください（教示2）”。教示2を終えた後、実験者は別室に移動した。葛藤の会話が終了した後、臨床心理士が夫婦の会話に加わり、その問題の具体的解決について話し合いを進めた。そして最後に、この実験についての感想を求め、実験の意図をさらに詳しく説明しその理解を共有した。

Ⅲ. 会話分析

VTR に記録された夫婦の全ての会話のトランスクリプトが作成された。しかし、時間上と作業上のコストの関係から非言語行動の分析、ディスクオリフィケーションの分析は、葛藤的な話題が始まってから夫30発話ユニットと妻30発話ユニット、すなわち、カップルで計60発話ユニット（会話の内容の区切りの良さから、60ということにした）が対象にされた。また、本研究では、Bavelas, J. B.¹⁶⁾¹⁷⁾の主張する、客観性は相互主観的合意に過ぎないという立場を受け入れ、次のような判断基準と方法を用いた。

1. 問題レベルの判断基準

その問題について話し合うことで、①どのくらい会話に参加する人々の関係を気まづくするか、②どのくらい相手を傷つけたりするか、というその人々の関係に危機を与える程度として評価される。2名の評価者はトランスクリプトの会話（60発話ユニット）を読んだ後、この2項目について5件法（「全く～ない」から「非常に～ある」ま

で）で、独立して評価した。評価者間の評価の相関は、.707107であった。

2. 相互作用レベルの判断基準

会話に参加する人々の関わりによって評価される。具体的には反応を求める行動である視線の方向付け、反応を求めるうなずき（頭の動き）、相互作用的ジェスチャー、対人言語をその指標とし、その使用数が高ければ、高いレベルの相互作用が行われているとして評価した。各行動指標についての分析は最初（1ケース）2名の分析者によって行われたが、その判断が一致したことから、残りは1名の分析者が行うことになった〔注：なお、対人言語は、会話分析の際に、被験者である夫婦間の出身地方の違いにより、語尾の違いが見られたため、最終的に指標からはずした〕。

- ①視線の方向付け：話をしている間に、聞き手に対して視線を方向付けている行動。
- ②反応を求めるうなずき（頭の動き）：話し手が発話したフレーズの最後で行う、相手に反応を求めていると見なせる頭の動きの回数。一般的に視線を伴うが、そうでない場合もある。
- ③対人言語：対話する相手に反応を求めることを強調する言葉。一般的には話し手の発話したフレーズの最後に使用される。
- ④相互作用的ジェスチャー：指あるいは手の一部が聞き手に方向付けられ、対話する相手の言葉を引用したり、指摘したり、また、発言権を譲渡するために使用される手の動き。

3. その他の行動指標とその判断基準

マイクロ分析（分析Ⅱ）において、言語的ディスクオリフィケーションというものがどのような非言語行動と関連があるかについて探索的検討を行うため、その他の行動指標も取り入れることにした。

- ①話題ジェスチャー：物事を説明する際に描写のために使用される手の動き。
- ②うなずき：聞き手反応としての理解と同意を含む反応を示すうなずき。
- ③回避：視線をそらすなどに見られる回避的行動。

- ④笑顔：微笑んでいると見なせる表情。
 ⑤笑い：笑顔に笑い声 (hahaha) が伴う行動。

4. ディスクオリフィケーションの判定基準

本研究では、Bavelas, J. B.⁴⁾の“ディスクオリファイされたメッセージは、コミュニケーションにおける4つの基本的側面である送り手（誰の意見であるか）、内容（何が言われているか）、受け手（誰に対して言われている意見であるか）、文脈（質問に対する直接的な応答になっているか）のうち1つ以上を不明確にするものであり、4つの点から評価可能である”という提案に従い、ディスクオリフィケーション反応を以上の4項目において「明確である」か「不明確である」かの2件法によって評価した。

しかし、Bavelas, J. B.⁴⁾が述べているようにディスクオリフィケーションは4つの評価のうち1つ以上における相対的な曖昧さであり、曖昧か曖昧でないかの明確な線は無いに等しい。そこで、2名の評価者に、ディスクオリフィケーションのいくつかの例を提示し、説明した後、その2名の評価者が独立にランダムに選んだ10の発話の評価を行った。その結果、高い相関 (.814509) が見られたため、残りの発話は全て1名の評価者によって行われた。

5. 得点化について

前述したように、葛藤的な話題が始まってから夫30、妻30で1カップルにつき計60発話ユニットを対象に得点化を行った。得点化は次のような方法で行われた。

- ①問題レベルは、2名の評価者の相関が高かったため、2名が評価した点の平均を得点とした。
 ②発話の単位は、相手の発話、あるいは聞き手反応としてのうなずきが見られるまでを1ユニットの発話とした。また、一方が発言権を譲ったにもかかわらず、他者が反応しない場合は沈黙とした。
 ③1つの発話ユニットに付随する各非言語行動を調査し、付随している場合に1点、付随していない場合は0点とした（最高点は3点、最低点

は0点ということになる）。

- ④分析Ⅱで指標とした他の非言語行動も上記と同様に付随している場合に1点、付随していない場合0点とした。
 ⑤ディスクオリフィケーション反応の得点化は、1つ前の相手の発話ユニットを参考にし、各発話ユニットを上述した4項目において評価した。1項目ごとに「明確」であれば0点、「不明確」であれば1点とした。4項目すべてにおいて「不明確」であれば4点、4項目すべてにおいて「明確」であれば0点を与えた。

IV. 結果

1. 分析Ⅰ—マクロ分析—

分析Ⅰではマクロ分析として、ディスクオリフィケーション反応を予測する問題—相互作用モデルの検討を行った。まず、各ケースの問題レベルを示す得点と各ケースのディスクオリフィケーション反応の合計得点（夫婦の得点の和）を対応させたものが表1である。

表1 各ケースの問題レベルとディスクオリフィケーション

	問題レベル	ディスクオリフィケーションレベル反応
ケース1	8	35
ケース2	7.5	58
ケース3	4	7
ケース4	4.5	22

問題レベルを示す得点とディスクオリフィケーション反応の合計得点の相関は.831225と非常に高いものであった。しかし、ケース1とケース2において、問題レベルを示す得点がディスクオリフィケーション反応の得点を予測しないことが分かる（図1）。

そこで次に、相互作用レベルの検討を行った。夫婦の一方、例えば夫の相互作用レベルを示す得点と妻のディスクオリフィケーション反応の得点を対応させたものが表2である。

相互作用レベルを示す得点とディスクオリフィケーション反応の相関もまた、.56997とかなり高

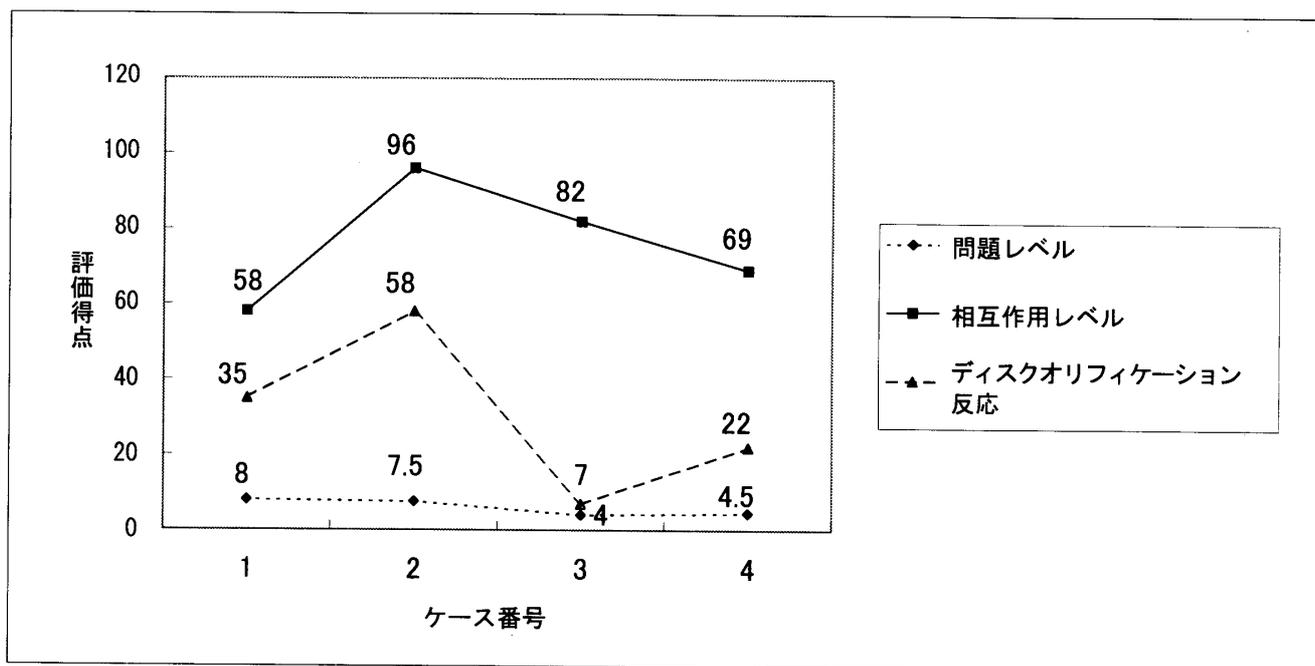


図1 各レベルの相対的關係とディスクオリフィケーション反応の得点

表2 各ケースにおける一方の相互作用レベルの得点と他者のディスクオリフィケーション反応の得点

ケース	相互作用レベル	ディスクオリフィケーション反応
ケース1 夫→妻	32	19
ケース1 妻→夫	26	16
ケース2 夫→妻	37	19
ケース2 妻→夫	59	39
ケース3 夫→妻	49	6
ケース3 妻→夫	33	1
ケース4 夫→妻	40	16
ケース4 妻→夫	29	6

いものであった。しかし、図1をみると、相互作用レベルを示す得点とディスクオリフィケーション反応の得点の幅がケース間で異なることが分かる。この幅の広さの差異は問題レベルに対応するものであり、その相関は -0.87739 と高いものであった。すなわち、これは、問題レベルと相互作用レベルの相対関係から、ディスクオリフィケーション反応がより予測できることを示唆する。

2. 分析Ⅱ—マイクロ分析—

分析Ⅱでは、ディスクオリフィケーション反応の生起する状況をより詳細に検討することを目的とし、マイクロ分析を行うことにした。そこで、

一方の視線の方向付け、反応を求めらうなずき、笑顔、笑い、回避、反応を示すうなずき、相互作用的ジェスチャー、話題ジェスチャー、自己ディスクオリフィケーション反応を行動指標として取り上げ、それに対して他者のディスクオリフィケーション反応がどのようなコミュニケーションの流れの中で発生しているかをより詳細に検討していくことにした（なお、ここでのディスクオリフィケーションは、行動指標と同次元で扱うため、ディスクオリフィケーションをしていなければく先に1点から4点と得点化されたもの>1点、していなければく先に0点として得点化されたもの>0点として、得点化された）。具体的には、一方の視線の方向付け、反応を求めらうなずき、笑顔、笑い、回避、反応を示すうなずき、相互作用的ジェスチャー、話題ジェスチャー、自己ディスクオリフィケーション反応と、それに対する他者のディスクオリフィケーション反応を時系列的に並べ、線グラフに描き、そこに描かれた時系列的な相互作用のパターンを“目で読む統計分析法”¹⁸⁾を用いて検討した。そこで特徴付けられたパターンから、①相互作用レベルの指標とした、視線の方向付け、反応を求めらうなずき、相互作用的ジェスチャーという行動が、単独では他者のディスクオリフィケーション反応の生起を説明しないこと、②むしろ、一方の

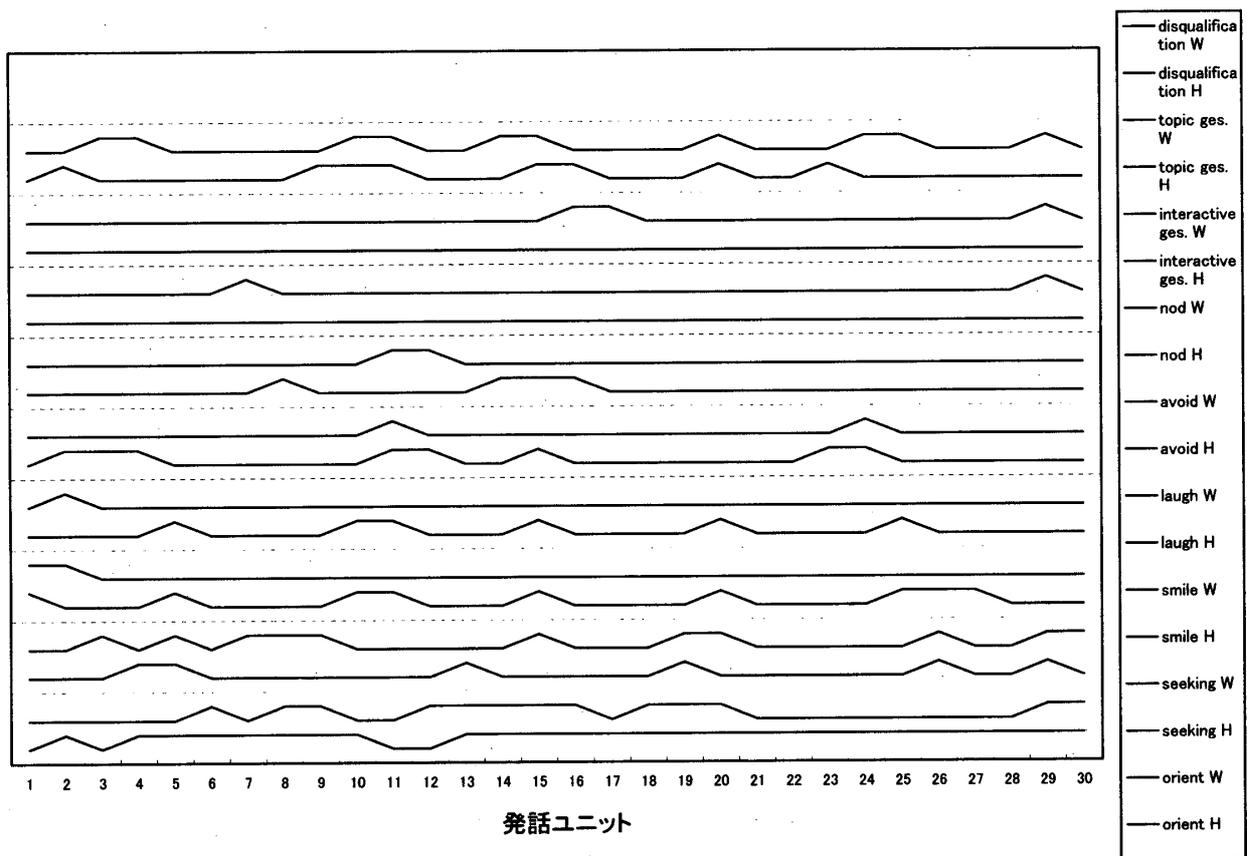


図2-1 夫婦（ケース1）のディスクオリフィケーションと各非言語行動の生起の相対的变化

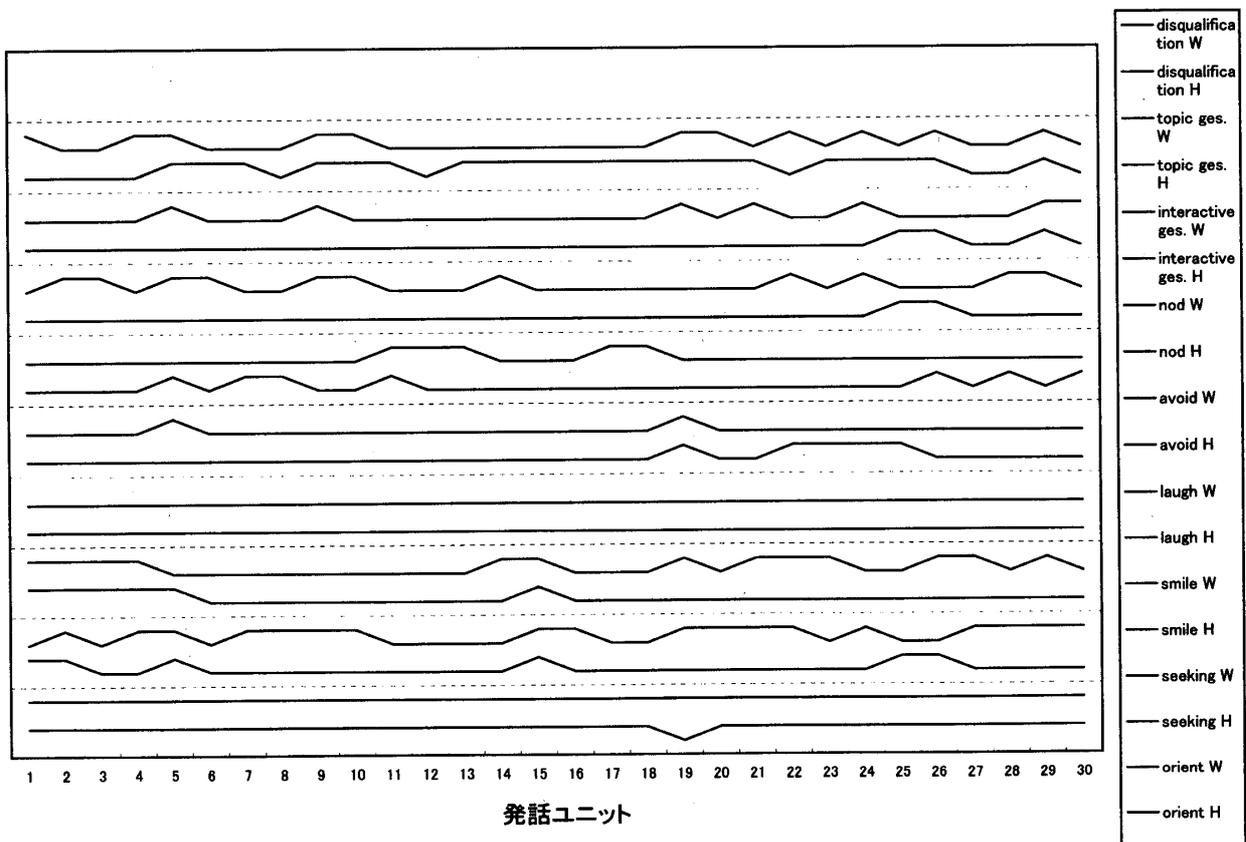


図2-2 夫婦（ケース2）のディスクオリフィケーションと各非言語行動の生起の相対的变化

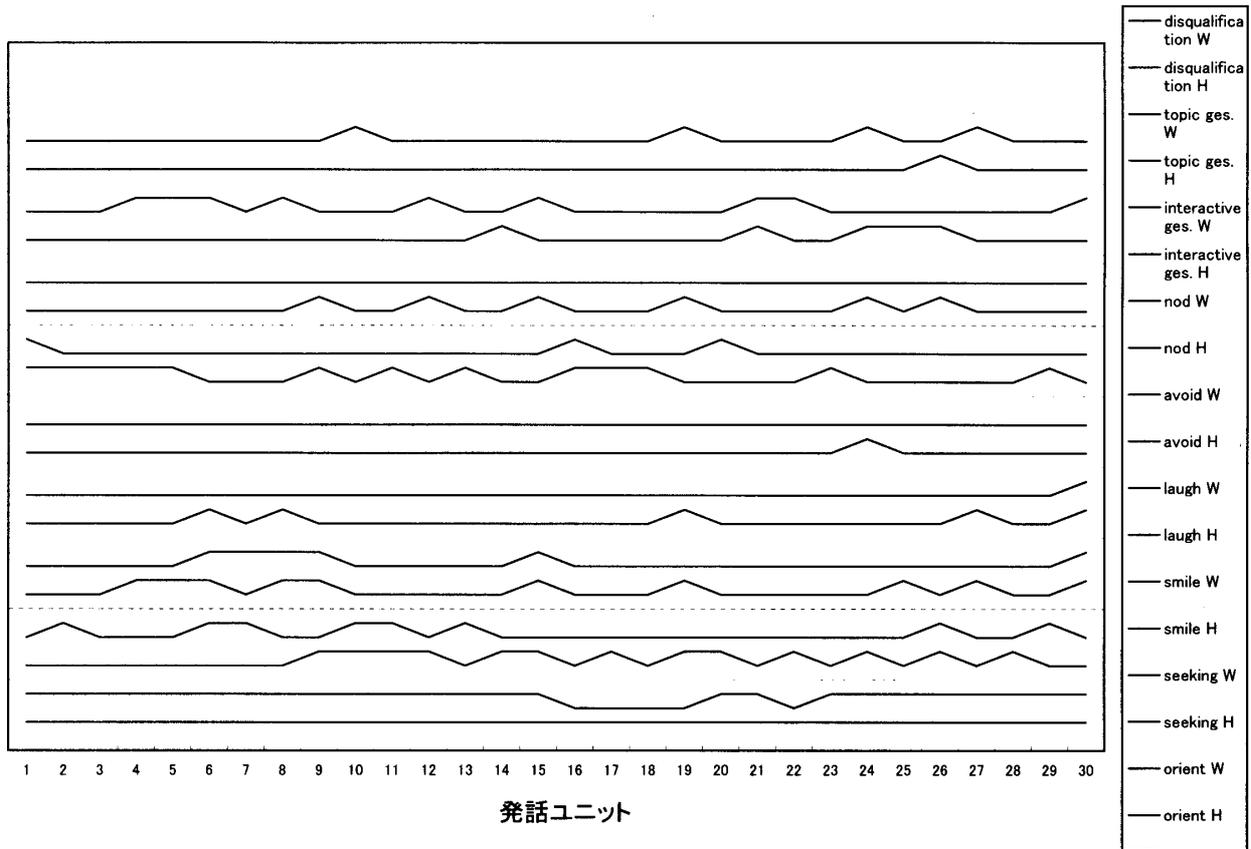


図2-3 夫婦（ケース3）のディスコオリフィケーションと各非言語行動の生起の相対的变化

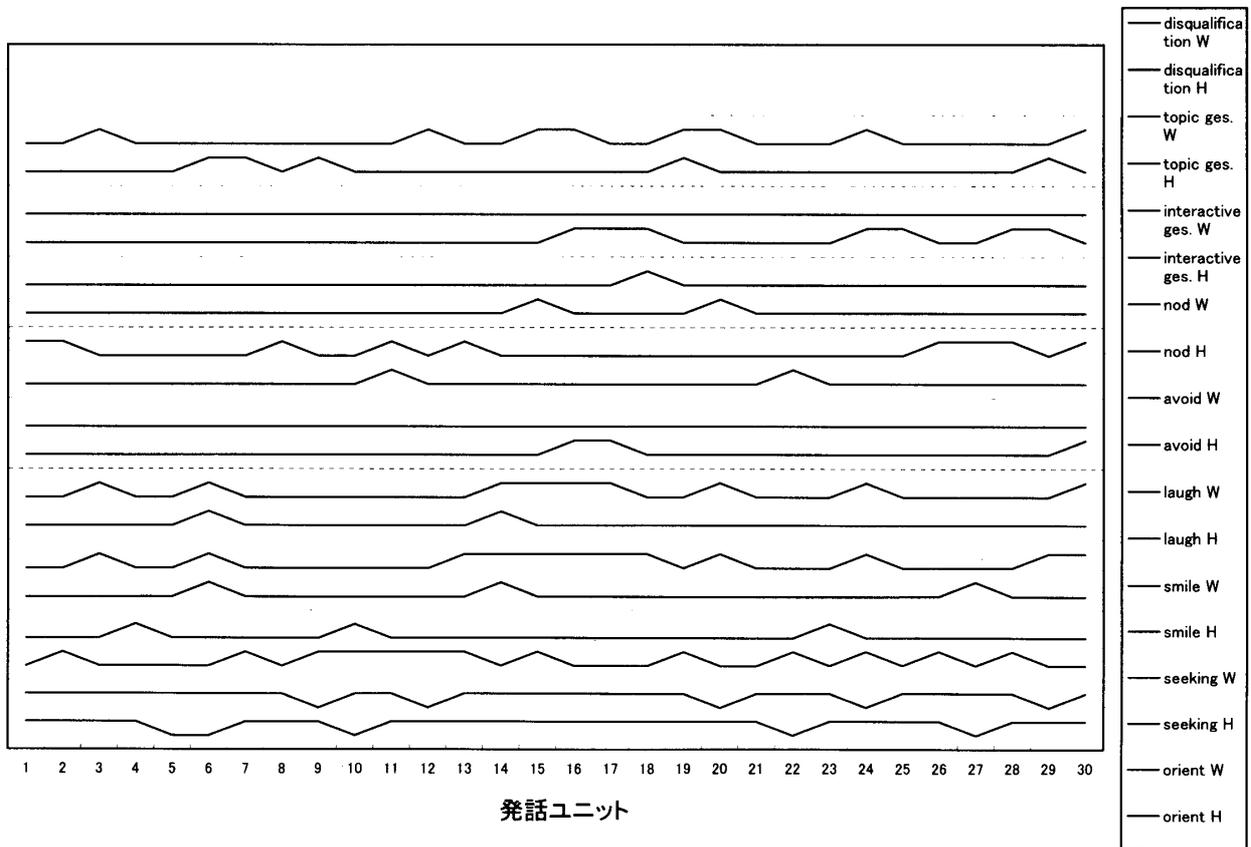


図2-4 夫婦（ケース4）のディスコオリフィケーションと各非言語行動の生起の相対的变化

ディスクオリフィケーション反応の生起パターンと他方のディスクオリフィケーション反応の生起パターンが同調していること、が分かる(図2-1から図2-4)。なお、図中のWは妻、Hは夫を示している)。また、③他者のディスクオリフィケーション反応の生起パターンと同調している行動指標は個人間で相違が見られた。まず、ケース1では、妻のディスクオリフィケーション反応と同調する夫の行動は笑いや笑顔など曖昧さを増加させる行動であり、一方、夫のディスクオリフィケーション反応と同調する妻の行動は明らかではなかった(図2-1)。次に、ケース2では、妻のディスクオリフィケーション反応と同調する夫の行動は明らかではなく、妻の個人内行動ではディスクオリフィケーションと話題ジェスチャーが同調していた。すなわち、夫のディスクオリフィケーション反応と同調する妻の行動もまた話題ジェスチャーということになる(図2-2)。ケース3では、妻のディスクオリフィケーション反応と同調する夫の行動は話題ジェスチャーと相互作用的ジェスチャーであり、一方、夫のディスクオリフィケーション反応と同調する妻の行動は明らかでなかった(図2-3)。最後に、ケース4では、妻のディスクオリフィケーション反応と同調する夫の行動は明らかではなく、妻の個人内行動ではディスクオリフィケーションと笑顔が同調していた。また、夫のディスクオリフィケーション反応と同調する妻の行動は笑顔と笑いであり、夫の個人内行動ではディスクオリフィケーションと視線の方向付けが無いことが同調していた(図2-4)。

次に、個人内及び個人間における行動の継起パターンを明らかにするために、継起分析(Sequential Analysis)を行った。最初に、各セルの理論値を{(当該の先行行動の全生起頻度) × (当該の後発行動の全生起頻度)} / (行動連鎖の全生起頻度)で求めた結果、期待値が5以下の場合がほとんどであるため、厳密には検定を行うことは妥当ではないが、参考として χ^2 検定を行った。その結果、個人内では、笑顔に続いて反応を求める頭の動きが行われる傾向($\chi^2(1)=2.89$, $p < .1$)、及び、視線の方向付けに続いて話題ジェス

チャーが行われる傾向($\chi^2(1)=2.87$, $p < .1$)があることが示された。個人間では、ディスクオリフィケーションに対する回避($\chi^2(1)=3.91$, $p < .05$)、うなずきに対する話題ジェスチャー($\chi^2(1)=5.22$, $p < .05$)、うなずきに対するうなずき($\chi^2(1)=4.06$, $p < .05$)、笑いに対する笑顔($\chi^2(1)=3.07$, $p < .1$)、笑いに対する視線の方向付け($\chi^2(1)=3.02$, $p < .1$)、反応を求める頭の動きに対する相互作用的ジェスチャー($\chi^2(1)=2.98$, $p < .1$)という連鎖が示された。

V. 考 察

分析Iでは、実験において夫婦の葛藤的会話場面のみを扱ったことから、一方の相互作用レベルのみによって、他方のディスクオリフィケーション反応を高く予測した。つまり、問題以外のことについて話し合った場合、一方の相互作用レベルによって、他方のディスクオリフィケーション反応を本研究のように高い相関で予測することはできないと考えられる。それは、葛藤的会話の問題レベルを考慮したとき、その予測力が高まるという本研究の結果から主張できることである。さらに、問題レベルに関しては、ディスクオリフィケーション反応の生起を高い相関で予測した。しかし、相互作用レベルを考慮した方がよりその予測力が高まることが分かった。すなわち、本研究で仮定したディスクオリフィケーション反応を予測する問題-相互作用モデルは、4ケースという少数データではあるが、支持される方向にあったということが可能である。

分析IIのマイクロ分析では、一方の相互作用レベルの高さが他者のそれに対する反応をディスクオリフィケーションさせるという傾向は見られなかった。見られた傾向は、一方のディスクオリフィケーション反応の生起パターンと、他方のディスクオリフィケーションと回避的曖昧な非言語行動の生起パターンが同調しているということである。すなわち、マイクロには、矛盾するメッセージに対する他者の反応がディスクオリフィケーション反応であることが多い、という先の研究結果を支持するものであるということができよう。最終的

に、分析Ⅰでの結果と共に分析Ⅱの結果を総合的に解釈すると、ディスクオリフィケーションがより多く生起する会話では、一方の相互作用レベル、つまり、相互作用が全体的に高まるが、相手がディスクオリファイするすぐ前後の行動は曖昧で回避的で説明的な反応パターンであることが多い傾向にあるということである¹⁰⁾。

引用文献

- 1) Bateson, G., Jackson, D.D., Haley, J. & Weakland, J.H. Toward a theory of Schizophrenia. *Behavioral Science*. 1 (1), 1956, 251-264.
- 2) Haley, J. An interactional description of schizophrenia. *Psychiatry*. 22, 1959, 321-332.
- 3) Watzlawick, P. An anthology of human communication: Text and tape. Palo Alto, CA: Science and Behavior Books. 1964,
- 4) Bavelas, J.B. Situations that lead to disqualification. *Human Communication Research*. 9 (2), 1983, 130-145.
- 5) Bavelas, J.B. & Smith, B.J. A method for scaling verbal disqualification. *Human Communication Research*. 8 (3), 1982, 214-227.
- 6) Bavelas, J.B. & Chovil, N. How people disqualify: Experimental studies of spontaneous written disqualification. *Communication Monographs*. 53, 1986, 70-74.
- 7) Bavelas, J.B., Black, A., Chovil, N., & Mullett, J. *Equivocal communication*. London: Sage Publications. 1990,
- 8) Bavelas, J.B., Black, A., Bryson, L., & Mullett, J. Political equivocation: A situational explanation. *Journal of Language and Social Psychology*. 7 (2), 1988, 137-145.
- 9) Bavelas, J.B., Black, A., Chovil, N., & Mullett, J. Truths, lies, and equivocations: The effects of conflicting goals on discourse. *Journal of Language and Social Psychology*. 9 (1-2), 1990, 135-161.
- 10) 若島孔文, 生田倫子, 長谷川啓三. 葛藤場面に埋め込まれた矛盾するメッセージの伝達とディスクオリフィケーション -二重拘束理論の臨床心理学的研究-. *カウンセリング研究*. 33, 2000, 148-155.
- 11) Bavelas, J.B. & Chovil, N. (in press) Faces in dialogue. In J. Russell (Ed.): *Facial expression: New directions in theory and method*. Cambridge University Press.
- 12) 若島孔文. 非言語的マネジメント・コミュニケーションと対話者間の関係性の認識の影響 -家族システムにおける第2次変化を求めて-. *カウンセリング研究*, 30(3), 1997, 227-233.
- 13) Bavelas, J.B., Chovil, N., Lawrie, D.A., & Wade, A. Interactive gestures. *Discourse Processes*. 15, 1992, 169-189.
- 14) Bavelas, J.B., Chovil, N., Coates, L., & Roe, L. Gestures specialized for dialogue. *Personality and Social Psychology Bulletin*. 21 (4), 1995, 394-405.
- 15) 渡部敦子, 若島孔文. Interpersonal words! -日記文と手紙文を比較して-. *日本家族心理学会第15回大会発表抄録集*. 1998, 15.
- 16) Bavelas, J.B. Gestures as part of speech: Methodological implications. *Research on Language and Social Interaction*. 27 (3), 1994, 201-221.
- 17) Bavelas, J.B. Theoretical and methodological principles of the equivocation project. *Journal of Language and Social Psychology*. 17 (2), 1998, 183-199.
- 18) 若島孔文, 長谷川啓三. 目で読む統計分析法のすすめ -臨床事例・少数標本におけるコミュニケーションの時系列分析法-. *日本家族心理学会第16回大会発表抄録集*. 1999, 36.